

1月16日に社会医学技術学院（東京都小金井市）で、「地域で医療・介護・福祉に関わるさまざまな方々と顔の見える関係づくりをしたい」、そんな思いから始まったたまケアLiveのVol.5「医療のこと、介護のこと、専門職に徹底質問」を開催しました。

たまケアLiveは、医師や薬剤師、ケアマネジャー、理学療法士を中心に会を発足。さまざまな職種が気軽に参加できる場づくりと、発信の場がない若手が来やすいような内容の「おもしろさ」を追求し、「次世代リーダーを育成する」という目的で開催を続けてきました。

そして、いま、たまケアLiveは、医療・介護の専門職や地域の住民などの立場に関係なく、自分が暮らしている地域のことをフラットに考え、「専門職と地域住民をつなぐ」をコンセプトに活動を行なっています。

これまでのたまケアLive

Vol.1は2013年9月に、「2025年に向けて僕たちは何ができるか」というテーマで開催しました。第1部では新田クリニックの新田國夫氏を迎え、「地域包括ケアシステムとは」と題して地域包括ケアシステムの解説と、2025年に向けての提言をしていただきました。第2部ではパネリストとして地域で活躍しているケアマネジャー、理学療法士、行政担当者に加え、会場を交えながらトークディスカッションを行ないました。Vol.2は2014年7月、「たまケア

Liveで野望の話をしよう」というテーマで、いしかわ921在宅ネットワークの立役者である金沢赤十字病院の西村元一氏を招いての講演でスタート。「多職種連携なんてあたり前、これからは市民主導の時代です」「住民を巻き込んで、ではない。自分たちも住民です」というメッセージがとても印象的でした。続くワールドカフェでは、職種の壁を越えて、1人ひとりが住民目線で地域をよくしたいという野望と希望にあふれたディスカッションで盛り上がりました。

そこで暮らす 1人の人として たまケアLive Vol.5を開催

Sync happiness co., Ltd. 代表取締役社長

糟谷明範

Vol.3は2015年3月、「ききたいこととつたえたいこと」のテーマで普段対話する機会のない行政の本気を聞いてみようという試みでした。第1部のシンポジウムでは武蔵野市、国立市の取り組みについて講演があり、それを受けての第2部では、「行政が考える地域」と「現場が考える地域」についてのディスカッションを行ないました。

Vol.4は2015年10月に「たまLive Nプロジェクト。どうする？ doする？」と題し、第1部では、「自宅で暮ら

せなくなったらどうする？ 食べられなくなったらどうする？ わからなくなったらどうする？ 歩けなくなったらどうする？」をテーマに、介護生活コンサルタントや歯科医師、認知症専門ディサビスの管理者、理学療法士によるシンポジウムを行い、第2部ではグループワークを実施。

参加者は、Vol.3までは医療・介護専門職がほとんどでしたが、Vol.4からは地域住民の参加も増えてきて、病気になる時や介護が必要になったときにどんな専門職がいて、どんなサポートが受けられるのかを理解できたなど、地域住民目線での感想もありました。

Vol.5の目的

Vol.5には2つの目的がありました。1つは、認知症患者の事例をもとに「物忘れ」「ADL低下」「食べられなくなる」という死に向かっていく過程に起こり得るイベントにおいて、地域住民の方にそのときに自分は何をしたらよいのか、どんな専門職がそこに関わるのを知っていただくこと。もう1つは、自分の身の回りでトラブルが実際に起こったときに、専門職に対して気軽に意見が言えたり、疑問に思ったことが聞けるようなつながりをつくることでした。

参加者は30名で、うち医療・介護専門職以外は6名と、まだまだ地域住民の参加は少ないのが現状で、今後の課題です。第1部では「その時私たちはどうする？ doする？」というテーマでたま

ケアLiveメンバーによる認知症事例を用いたトークセッションを行ない、第2部では専門職と地域住民が混ざったグループに分かれ、第1部で感じた疑問をひたすら専門職に質問するというかたちでグループワークを行ないました。

これからもコンセプトは「つなぐ」

今後またたまケアLiveは、「医療・介護専門職と地域住民をつなぐ」をコンセプトに活動を続けていきます。つながりが生まれることで、専門職は地域のことを知り、そこで暮らす住民は専門職が何



をしているのかを知ることができそうです。

私たちは医療・介護専門職である前に、その地域に暮らす1人の住人です。ただ単に専門的な知識を伝えるだけではなく、地域にある問題や文化、慣習を理解し、対等な関係でつながっていくことが大切です。人と人とのつながりが1つのコミュニティとなり、さらにコミュニティ同士がつながることで、たくさんの方々が住んでいる街の至るところで行なわれている。そんな未来を想像しながら、活動を続けていきます。